The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 義太夫節の語りにおける規範と変形 ： 地合の音楽学的研究 |
| Author(s) | 山田, 智恵子 |
| Citation | 大阪大学, 2003, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/44431 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 山　田　智恵子（やま だ ち え こ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（文　学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　18002　号 |
| 学位授与年月日 | 平成15年3月31日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当 |
| 学　位　論　文　名 | **義太夫節の語りにおける規範と変形－地合の音楽学的研究－** |
| 論　文　審　査　委　員 | （主査）<br>教　授　山口　修<br>（副査）<br>教　授　根岸　一美　　教　授　天野　文雄 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、人形浄瑠璃「文楽」の音楽としての義太夫節において「詞（ことば）」と呼ばれる科白の部分を除いた、「地合（じあい）」という音楽的な部分の声のパート（語り）を対象とする音楽学研究である。現在まで伝承され演奏された「音」を対象とした研究であり、歴史的な側面を扱う研究ではない。その目的は、義太夫節の「地合」とは、どのような音楽的しくみでできているのか、また何が音楽上の「規範」となり、何が「変形」するのかを解明することにある。

本論で用いる用語の意味と範囲や研究史を概略する序章に続いて、本論は大きく2部構成をとり、全4章と結章から成る。第Ⅰ部「義太夫節の音楽構造と音楽の視覚化」の第1章「義太夫節の音楽構造」ではまず、劇構成と音楽構成の緊密な関係や語り物としての分節法との対応について述べる。さらに、旋律様式上の概念である「地・地色・色・詞・ふし」について論じたうえで、義太夫節の地合において、一番多く存在するにもかかわらず、ほとんど論じられてこなかった側面に着目して「常の地（つねじ）」という新しい概念を提起する。第2章「義太夫節研究における音楽の視覚化」では、インサイダーの用いる楽譜のもつ意味、演奏者間あるいは素人の愛好者への伝承の手段でもあった教本、口伝書類、節尽し類について述べ、音楽学的に五線譜化する方法とその問題点についても論じる。

第Ⅱ部「演奏の実際－その変形と規範」は、実際の演奏において、変形はどのようなところに現れ、どのように定着してゆくのか、また規範となる枠組みとは何かを考察する本論文の主要部分である。第3章「同一曲における演奏者による変形」は、演奏者による変形が旋律の外形を変えるほどに大きいものであるとしたら、一つの事例にたいして常に複数の演奏者の演奏例を集めなければ音楽的研究が成り立たないのではないかという疑問に対する反証を意図している。具体的には、詞章・節付けが同じという前提条件下での地合における変形は、演奏者個人の身体的特質（声の使い方・息の扱い）に起因する「分節法」「字配り」「音遣い・こぶし」に見られること、アクセントによる音高の上下、一部の音高にも見られること、さらに、演奏者により全く旋律の骨格や外形が異なることはごく一部にすぎないということを指摘する。第4章「地合における規範」では、規範はどのようにして生まれ、どのように認識されているか、また「常の地」においては何が規範となるかを論じる。常の地にはこれといった特徴がなく、しかも義太夫節の地合の多くの部分を占める。この「常の地」において類型性を認識する基準となるのは詞章および語義であること、浄瑠璃の文章における常套句や常套表現において旋律も同じかたちになることを指摘する。結章では、義太夫節は演奏者の個性や曲の属性により多様な変形を含みつつも、「常の地」においては、詞章・語義の類型に基づくゆるやかな規範が存在するという結論が述べられる。

（分量　本文 145 頁 400 字詰原稿用紙換算約 435 枚　付録参考文献、日英要旨等 62 頁）

## 論文審査の結果の要旨

諸民族は、歴史と現在において多様なかたちで「語りもの」の世界を育んできた。しかし、その文芸的、演劇的な側面はもとより音楽的にも全体や細部の構造が充分には解明されてはいなかった。本論文は、日本を代表する語りものが示す複雑な表演の様相を音楽的観点から長年にわたって観察してきた著者が、その膨大な量におよぶ研究成果のごく一端をひとつの論点にしぼって論じることにより、大きな対象の重要な部分を明らかにしたものである。しかも、伝統的な音楽慣習をその伝統のにない手の視点で理解するだけでなく、他の種目との比較にも耐えられる概念を提示して具体的に論じている点で高く評価される。また、文芸と音楽の両面にまたがった緻密な転写・採譜の作業に裏付けられた論の展開になっていて、説得力がある。

しかし、歴史的変遷をたどることを意図的に排除していることや、語りの実際を論じる上で困難をきたすことが充分に予測されるという理由から、語りが三味線のパートとどのように関連しあっているかという視点も意図的に避けていることは、論旨を絞る意味で賢明であったとはいえ、その方向へと研究を深める可能性を提示すべきであった。しかし、この短所は本論文に続く研究により徐々に補ってゆくことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。